『千葉大学　ユーラシア言語文化論集』16（2014）：1 － 11

特集：第４回東方ユーラシア国際シンポジウム「ユーラシアの叙事詩と言語」

求婚難題・婚姻闘争・雌雄選択

荻原眞子

はじめに

叙事詩の世界では婚姻にかかわって多様なテーマやモチーフがみられる。特に、どのように嫁や婿を決めるのか、嫁や婿の候補者をどのように承認するのかということについてはさまざまな試みがなされている。神話、昔話，英雄叙事詩には洋の東西を問わず求婚難題、試練、競技、闘争や決闘が見られる。このような配偶者選定の方法をここでは便宜的に婚姻闘争とよび、その根底にある意味を考えてみるなら、究極は自然的存在としての人間の本質にいきつくように思われる。自然界には雌を占有するために雄のあいだでおこる闘争、すなわち、雌雄選択がある。叙事詩では婚姻に際して勇者たちが互いに力を競う話が顕著に認められるが、この婚姻闘争は自然界の雌雄選択と生物学的な次元では基を一にしていながら、社会的存在である人間の言語文化として求婚難題として多様な展開をみたものと考えられないであろうか。

Ⅰ　求婚難題

神話や昔話、英雄叙事詩で求婚者に難題を課し、それを達成することを結婚承諾の条件とする多くの場合、難題を課すのは女性の側である。そして課題者としては、a)求愛された女性自身、b)女性の兄弟もしくは父親、c)女性の母親という場合が区別できる。

事例１　女性自身からの課題を出す典型的な例としてはまず第一に『竹取物語』が思い起こされる。「今は昔、竹取の翁というもの有りけり」とはじまる日本最古の物語である。竹取を生業にしている翁が毎日採る竹のなかに根元の光る竹があり、中に 3 寸ばかりの小さな、たいへん可愛らしい人がいた。翁は自分の子になるべき人であろうと言って、妻の媼に育てさせる。その後、翁が竹を切ると、節ごとに金が入っていて、翁は裕福になった。娘が大きくなったので、祭司を招いて名前をかぐや姫とつけ、盛大な披露をおこなった。世界中の男が、この美しい人を得たい、見たいと引きも切らずにやってきた。その中に「色好み」と評判の高い 5 人がいた。その名は石作りの皇子（いしづくりのみこ）、車持の皇子（くらもちのみこ）、左大臣阿部の御主人（あべのみむらじ）、大納言大伴の御行（おおとものみゆき）、中納言石上の麻呂足（いそのかみのまろたり）であった。求婚者たちの絶え間のない来訪にとまどう翁に、かぐや姫は「わたしが見たいと思う物を見せてくれる人が他の人より愛情が深かったとして、お仕えしましょう」という。こうして、5 人の求婚者にそれぞれ「仏の御石の鉢」、「蓬莱山の玉の枝（根が銀、茎が金、実が真珠の木の枝）」、「火鼠の裘（かわごろも、焼いても燃えない布）」、「竜の頸の珠」、「燕の産んだ子安貝」をもってくるように求める。それはいずれも存在しない品で、取得不可能な課題であった。5 人の貴公子たちは知謀を巡ら

し、人を遣りあるいは自ら冒険に出て品ものを得ようとするが、所詮はかなわぬ課題であった。かぐや姫は帝の求婚をも退け、3年ほどの後の8月15日の満月に月界からの使者に連れ去られる。

事例2　女性自身からの課題はフィンランドの『カレワラ』にも見られる。この叙事詩には主人公たちが花嫁を求めて北方へ遠征する話がいくつかある。その一つのエピソード（第8章）では、傷ついて漂着した主人公の老ワイナモイネンを救ったポホヨラの女主人ロウヒが、サンポを鋳造するなら、自分の娘を娶せようといって、故郷へ帰る馬と橇を与える。その帰路でワイナモイネンは美しい乙女に遇い、彼女を自分の橇に乗せようとする。乙女は「もしも刃も尖（さき）もなき小刀にて、おん身が馬の毛を切りとりて結節（むすびのめ）のみえざるように玉子を我れに結びつけ得ば」という。ワイナモイネンはそれを難なく実現するが、乙女はなおも「もしおん身が一片をも散らさず、我が与うる石の皮を剥ぎ、氷の大いなる塊を砕くならば」という。老いて不抜なるワイナモイネンはそれをやり遂げて、乙女を自分の橇に乗るようにさそう。ところが、乙女はさらに三つ目の注文をつける。「我が紡錘の小片もて、我が梭の小片にて、我がために小舟を作り、その小舟を水に入れ、海に浮かばせ給うなら、我はおん身に随いいかん」と。その小舟を造っている時にワイナミョイネンは斧で自分の足を傷つけ、流血を止めるための呪文を求めて諸処を訪ねる。傷を癒やした後、制作した舟で娘のところへ行くが、乙女は老人ワイナモイネンを拒み、サンポを創造した若い鍛冶のイルマリネンを選ぶ（第18章）

事例3　アイヌの英雄叙事詩ユーカラでは娘の庇護者としてしばしば兄や姉が登場する。妹を庇護し、その結婚に影響力をもつのは兄である。英雄叙事詩の主人公は幼い少年ポイヤウンペであるが、概して、この少年英雄にとって花嫁はたび重なる戦いと遠征の直接の目的ではなく、また、その結婚は物語の主題ではない。花嫁は遠征や戦いのさなかに見いだされて、共に凱旋してくるという場合が多いが、その発端となるのは求婚難題である。

もっとも典型的なユーカラ『虎杖丸』（いたどりまる）の発端は黄金のラッコの争奪である。石狩彦が石狩川の河口に出没する黄金のラッコを「潜って手捕りにした者に、わが妹を、わがもつ宝を一緒にして、献ずる」と触れをだす。幼い（はずの）主人公ポイヤウンペは密かに居城を抜けだし、河口まで行くと、石狩の壮麗な山城から女人が現れるが、それは美女なればこそ、醜女であって、その様子をみているうちにポイヤウンペは「憎しみの情を抱く」。そのうちに大勢の挑戦者たちが水に飛び込んで、ラッコを捕ろうとするが果たせずに身を滅ぼす。ポイヤウンペは雄々しくも水中に躍りこんで、その獲物を捕獲して居城へ戻ってくる。ラッコは捕獲するが、その報償である石狩媛は娶ろうとしない。それをきっかけにラッコの争奪がはじまり、その争いは村々での戦いに広がる。

類似の難題は『ユーカラ集Ⅳ　朱の輪』にも見られる。このユーカラでは、真っ赤な投げ輪が飛来し、物議をかもす。それを「刺した」者に妹を献ずるという。

事例４　花嫁を獲得すべく求婚者は孤軍奮闘して難題に立ち向かうが、難題を課すのが女性自身ではない場合には、しばしばその花嫁が求婚者に知恵や解決手段を授けて、難題を克服して婚姻が成就する。このような例もユーラシアには広く共通して認められる。娘の母親が求婚者に難題を課し、娘が若者に解決の手段を授ける例を『カレワラ』（第 19 章）に見ることができる。ポホヨラの女主人である娘の母親は若い鍛冶のイルマリネンに危険な仕事を課す。その第一は、「鋤を使わず、犂の具を用うることなく、のたくる蛇の群れる、毒蛇の野を耕す」ことである。途方にくれるイルマリネンに花嫁の乙女は助言する。「おん身偉いなる原始の工匠よ！純金の鋤を鋳て、銀を鍍金（メッキ）し給え、それよりのたくる蛇の群れる、毒蛇の野を犂きに行き給え」と。その鋤を鋳造すると、イルマリネンは鉄の靴に鋼鉄の脛当て、鉄の鎧に鋼鉄の帯、鉄の籠手をはめて馬に乗り、蛇の野へ向かう。そうして、毒蛇の地を耕す。戻ってきてポホヨラの女主人に「おん身は今や娘を我に与うや、我が愛する者と我とを結ぶや？」と問うと、女主人は否と答え、さらに「もし、遠きトゥオネラの広き森にて、遥かなるマナの領内にて、トゥオニの熊を捕え、マナの狼を捉えるなら」という。イルマリネンは再び乙女の部屋を訪ねる。乙女は「いと堅き鋼鉄もて銜（くつわ）を造り、また鉄の勒（くつわ）を鋳造して、瀑流の泡立ち流れる、水中の岩に座し給え。かくてトゥオニの熊を猟り、マナの狼を捕え給え」と助言する。イルマリネンは、テルヘネタル・雲の世界の御娘に呼びかけて、霧を降らせてもらい、それに身を隠して、狼の大顎に勒をかけ、鉄で熊を縛る。しかるに、ポホヨラの女主人はなおも結婚を承知せず、こう告げる。「もし、巨大にして鱗ある梭魚（ぐっ）を、いと肥えて蹠（もが）ける魚を、すくうべき網を用いず、摑むに手を用いずして、おん身トゥオネラの河より、マナラの深き淵よりもたらせし時」に娘を与えようと。イルマリネンの花嫁は「落胆し給うな！猛き鷲を鋳給え、それが梭魚を捕うべし、いと肥えて蹠（もが）ける魚を引き上ぐべし」と。鍛冶のイルマリネンは一羽の猛き鷲を造り、鉄の爪を鍛え上げ、帆のごとき翼を拵え、その翼の上に登り、その鷲の背の上、羽骨の上に座る。トゥオネラの河で鷲は巨大な梭魚と激しい闘いを繰り広げ、ようやくにしてそれを捕らえると、槲の木の枝まで運んで、それを食らう。イルマリネンはその頭を持ち帰って、女主人への贈り物とする。彼女はここで「我が優しき小鴨を与えん」と言って、娘と鍛冶との結婚を許す。

Ⅱ　試練　―　しばしば娘の父親は求婚者に対して厳しい試練を課す。それを達成することが結婚承諾の条件ではあるが、場合によっては、暗に求婚者を排除することを意図しているかとも思われる。その苛酷な試練が求婚者・婿の命を危うくするとき、娘は呪的な手段などを授けて男を助ける。こうしてみると、試練は本質的には結婚しようとする二人に課せられたことになるのかもしれない。

事例５　『ユーカラ集Ⅱ　ポロオイナ』は文化英雄アイヌラックルの物語であるが、その「異伝Ⅳ（カムイオイナ）」は天女とアイヌラックルの結婚によってアイヌの生活文化が悉く天界からもたらさたという話である。ユーカラの冒頭では主人公のアイヌラックルは常に幼い少年として慈しみ育てられていると語られる。その少年があるとき初めて居城を出て、川上へのぼっていく。と

そこには神山があり、その山上には悪神の遊ぶ園、善神の遊ぶ園がある。夜半になると善神たちが集まりきて歌舞がはじまり、アイヌラックルがそのおもしろさに心をうばわれていると、夜明けに天から美しい少女が神駕にのって降りてきて、神々の遊びを見守っていた。その少女の美しさにアイヌラックルは妻をもつなら、このような少女をと思う。遊びが終わると神々は四散し、少女も行方が分からなくなる。その後、アイヌラックルは少女を恋いこがれて幾日も食事がのどを通らない。やがて、再び神園へでかけると、そこで「天の主神の娘が病気になっているが、どのような加持祈祷も効き目がない」ことを耳にする。アイヌラックルは神々が天上へ引き上げるのにつづいて上天に上り、壮麗な黄金の館にいくと、そこには翁神と媼神がいる。翁神の天神はアイヌラックルが娘の恋煩いの相手であることを識り、「試みるためしをやりおおせなかったら、相添すことはできない」といって、「6人の詞曲人に詞曲をやらせ、6人の聖伝人に聖伝をやらせ、最後に6人の恋歌人に恋歌をやらせる。そのとき、お身たち決して笑ってはならない。少しでも笑ったら添わすことはならん」という。ここで詞曲は英雄叙事詩ユーカラ、聖伝はオイナ、恋歌はヤイカテカラであるが、最後の恋歌では歌い手が恋いに狂う様を演じたので、女神が少し笑う。すると、翁神が声を荒げて「女が笑ったから、今一つ試みを課す。アイヌラックルは男が造るべき品々、臼・杵・箕・鞘・機を一日で造りあげ、女は女の造るべき品々、衣類や冠や首飾りやあらゆる針仕事を一日で造り上げるのだ。それが出来たらお身たちを夫婦にしてやる」という。アイヌラックルと天女とはそれぞれ一日で造りあげ、下界へ降りてそれを地上の人間たちに教える。そうして天上に引き返し、アイヌラックルは天神の一人娘の女神と天上で暮らした。

事例6　父親が厳しい試練を課す例として『古事記』のオオナムジ（大国主命）の話がある。オオナムジは八十神たちの迫害に遭って殺され、母の助力で生き返えると、スサノヲのいる根のくにへ遣られる。そこでスサノヲの娘のスセリビメに一目で心を奪われる。スサノオはオオナムジが葦原中国の醜い男（葦原色許男）だといって、まず、蛇の室（むろや）に泊める。スセリビメは「蛇の領巾[1]（ひれ）を授けて、「蛇がかみつきそうになったら、その領巾を三たび振って打ち払え」という。そのようにすると、蛇は静まり、オオナムジは安らかに眠って、室から出てきた。次の夜はムカデと蜂の部屋に入れられるが、ムカデと蜂の領巾を授かって無事に出てくる。さらに、スサノヲは鳴鏑（なるかぶら）を大野の中に射入れて、その矢を取ってくるようにといい、オオナムジが野に入ると、そこへ火を放つ。火に囲まれたオオナムジに鼠が「内はほらほら、外はすぶすぶ」[2]という。そこを踏むと、穴に落ち、そこにいる間に火は通りすぎる。鼠が鳴鏑をもってきてくれる。死んだと思ったオオナムジが戻ってくると、スサノヲは大室に呼び入れて、頭の虱を取らせる[3]。頭にいたのはムカデであった。スセリビメは椋の木の実と赤土（はに）を授ける。オオナムジがそれを口にし

[1]『古事記』の注では「領巾は上古女子が頸にかけたマフラーのようなもの」とあるが、マフラーというよりスカーフのイメージが適切ではなかろうか。
[2]『古事記』の注では、「内部はうつろで、外部はすぼんでいる」の意。
[3]「頭の虱をとる」というプロットはシベリアの諸民族の口承文芸に広く一般的である。アイヌには「urki kupa=虱を取って噛む」という表現が沙流で採録されている。［知里　1975:　212］

て、唾をはくと、スサノヲはムカデをつぶして吐き出していると思って、眠ってしまう。（この後、オオナムジはスセリビメを背負い、スサノヲの大刀と弓矢、天の詔琴(のりごと) をもって逃げ出す。追ってきたスサノヲは姫を妻とし、八十神を追い払い、出雲国の王、大国主となれと申しわたす。）

この話では蛇室、ムカデ室、虱（ムカデ）取りの試練に助力するのは姫であり、このことからいえば、話の本来の構成としてはこれが３つの求婚難題であろう。

事例７　ヨーロッパの昔話では求婚難題は At577 *The King's Tasks* として分類されている。この話では三人兄弟の末弟が難題を解決して王女を授かる。「三人の兄弟、王宮の庭の樫の木。王の娘がある難問を果たした一人に約束される。それは通常大木を切り倒すというものである。三人兄弟は出かけ、その途中で目にしたある物に一番下の弟だけが注意を払う、もしくは、お婆さんに親切にする。それによってその弟は不思議な物をもらう。それと教えられた情報によって弟は課題を解決するが、他の兄弟は出来ない。」つまり、王の難題を解決したものに対して王女が約束されるというものである。この話型の例としてグリム童話の「金のガチョウ」を挙げることができる。

王様が笑わない姫を笑わせたものを婿にするという。主人公は三人兄弟の末っ子のぬけさく。森のなかでこびとから魔法の「金のガチョウ」をもらう。ガチョウに手を触れるとくっついて離れない。ぬけさくが金のガチョウを抱えて歩いていくと、それに３人の娘、牧師、寺男と鍬を担いだ農夫が次々にくっついて離れない。その一行を見て笑わない姫が笑う。ところが王様は潔く約束を実行せず、さらに大量のワインと大量のパンを平らげるという条件をだす。こびとが若者を助ける。ぬけさくは姫と結婚し、その王国を継ぐという話である。［グリム Ⅰ　1985：451–457］

Ⅲ　英雄叙事詩における競技・闘争

英雄叙事詩の主要なテーマの一つは英雄・勇者が己にふさわしい花嫁を求めるという花嫁獲得である。そのために主人公の勇者は遙か未知の世界へ遠征し、行く先々では競争相手に競技や決闘を挑まれ、それに打ち勝って理想の花嫁を得る。一方、花嫁候補の乙女はしばしば消極的な存在ではなく、勇者に劣らず武技に長け膂力を誇っている。そうして、勇者はその運命の花嫁とも壮絶な勝負をすることがある。

事例８　東シベリアのエヴェンキの英雄叙事詩『イルキスモンジャ勇者』は、花嫁獲得をテーマとするもっとも典型的な叙事詩である。勇者たちは上中下の三世界を縦横に往来して戦いを繰りかえす。その目的の第一は地下界の怪物アヴァヒに奪われた嫁や乙女を救出するためである。地上や天上界の勇者たちは自分たちの姉妹や嫁を奪還するために地下界へ降り、そこでアヴァヒたちと激しい戦いを繰り広げ、時には窮地に陥ることもある。すると、兄弟や幼い息子が救援に降下し、苦戦の末にアヴァヒを破って捕らわれた女性たちを救出する。第二はその兄弟たちがそれぞれ定めの花嫁を求めて遠征し、そこでいくつかの試練をへてめでたく花嫁とともに凱旋する。勇者それぞ

れの物語は盛大な婚礼の祝宴で大団円となるが、その席でまた次の若者・勇者の嫁求めが話題になる。こうして、第三は次世代の息子たちの妻覓である。己にふさわしい配偶者を求めて、上界のはるかな遠地へ旅立ち、試練や戦いを克服して花嫁を得て帰還する。第四は乙女たちの闘争である。エヴェンキの叙事詩では乙女たちが遠征することはない。やってきた求婚者が地下界からの魔物アヴァヒであれば、彼女たちはその手強い相手と力の限りを尽くして闘い抵抗しなければならない。そのために娘たちは時がくると弓矢などの武技や体力の鍛練に励む。それはアヴァヒの襲撃に備えての保身のためばかりでなく、己の力量にふさわしい互角の勇者を婿とするためでもある。英雄叙事詩の世界の女性たちはこのように勇壮な闘士であり、加えて人智をこえた能力を秘めた強力なシャマンであることが多い。

事例９　『イルキスモンジャ勇者』の最後の段には中界のココルドコンの娘ソルコクチョンが年頃になって自己鍛錬をしはじめる話がある。かの女は見目麗しき乙女であった。ソルコクチョンは老鍛冶屋のトロンタイをつれて「中の世界の遠い外れ」と呼ばれる禿山の頂上に上り、そこにトナカイ遊牧で移動する一回分の広さの競技場をつくってもらい、毎日そこで鍛練をする。あるとき天空がかき曇り、一羽の鷹が舞い降りる。それは「雲を両親にもつ中界のデノル勇者」で、父のココルドコンに娘との結婚を申し入れる。若き乙女は自らこの勇者に技比べを挑み、銅の競技場へ誘い、いとも容易く地界の海の底の島に放逐する。この勇者は女シャマンによって救出され、くにへ帰される。

また、ソルコクチョンは鍛冶屋に頼んで、天穹を一周して戻ってくるような 8 尋の２倍の弓を造ってもらう。あるとき、それを天空に向けて放つと、戻ってきたその矢の穂先の根元には勇者の指の痕がある。乙女がもう一度矢を放つと、天からは別の銀の矢が落ちてくる。父親はその射手が善き者に違いないという。やがてあるとき雲の彼方から銀づくめの勇者、太陽ディラチャの息子モングンドル勇者が現れ、ソルコクチョンに求婚する。互いに相応しい相手であるかどうかの技比べをすることになる、一族郎党と召使いまでが参集するなかで矢を放ち、二人の絆が確かめられる。

この叙事詩のなかではすべてが誇張され、弓矢の大きさや重さばかりでなく、それを引き絞るのに幾昼夜をかけたというような表現がある［荻原　2001］。同様のことは次の叙事詩にも共通して認められる。

事例１０　ヨーロッパ中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』には剛力と武芸に長けた美貌の女王が登場する。ブルゴント国のグンテル王が不死身の騎士ジーフリトを伴って、イースラント国の女王ブリュンヒルトのもとへ求婚のために遠征する。女王は力比べを申し出る。もし、自分が負けたら王に随うが、反対に自分が勝ったなら王たちの命はないという。試合は「十二人の剛勇な武士が、ようやく運んできた」大石を投げてその後に跳躍することと槍投げであった。槍投げで運ばれてきた楯は「鉄塊をもって鍛えられ、これを運ぶにはブリュンヒルトの家臣が三人がかりでも容易でなかった」ほどの代物であった。それをみた王の側近は、王の実力は女王に及ばないと懼れる。ところが王に随伴してきた騎士ジーフリトは「秘策をもって王を護る」。それは隠れ蓑、つまりは

透明人間となって王の代わりに石投げ、跳躍と槍投げをすることであった。こうして王は女王に打ち勝ち、女王は自らの家臣を率いてグンテルに従い、ブルゴント国へ降嫁する。

ユーラシアの英雄叙事詩のなかに登場する女性たちはこの例に見られるようにしばしば婚姻に際して強力な闘士であり、加えて、超能力をもつシャマンであることが多い。そして、このことは叙事詩の世界のなかだけのことでなく、現実にもままあったことかもしれない。

事例１１　マルコ・ポーロの『東方見聞録』には、トルキスタンのカイドゥ王の娘アイジャルック王女が強力無双で、求婚者と力比べをしては次々に退けるという話が記されている。

このカイドゥ王にはアイジャルックという王女がありました。アイジャルックとはタタール語で「輝く月」の意味です。この王女はとても剛勇で、王国内の武士であれ若者であれ、誰一人として彼女に打ち勝つ者はいなかった。彼女が若侍をことごとく打ち負かした次第をお伝えしてみよう。

王女の父カイドゥ王は、彼女を貴族の誰かと結婚させようと思ったのであるが、彼女はそれに耳をかさず、力業で自分を打ち負かすような貴族がみつかるまでは、夫をとらないと言明した。そこで父王もやむなく、望みに任せてその夫を選んでもかまわないという許可の文書を与えた。、、、（中略）　彼女は世界の各地に布告して、もし彼女に挑戦したいと思う貴族の若者があって、首尾よく彼女に打ち勝つことができたなら、その男性を自分の夫に決めるであろうと宣言した。この報道が各地・各国に伝わると、我こそは彼女を相手に腕くらべをしてみようとして、多数の貴族が各地から集まって来た。さてその腕比べなるものは、、、（中略）まず王が、男女多数の臣下を伴って営地の正面天幕の中に座を占める。次いで王女が豪奢な装飾を施した革の下着をまとって、この大天幕の正面に現われる。その後に続いて、これも同じく革の下着をつけた若者が入場する。そして試合の条件はこうなのである。すなわち、もし若侍が王女に打ち勝ってこれを投げ倒すことができれば、王女を妻とすることができる。しかし反対に王女が若侍に打ち勝ったなら、彼は百頭の馬匹を提出して王女の所有に帰せしめなければならない。かかる条件での試合によって彼女はこれまですでに一万頭以上もの馬匹を獲得していた。つまり、どんな貴族の若侍・武士をもってしても、彼女を破ることはできなかったわけである。それもそのはず、彼女はその肢体がこの上もなく美しく整っているだけでなく、同時に巨人と見まがうばかりに背が高く、隆々たる筋肉をそなえていたからなのである［マルコ・ポーロ：273-274］。

Ⅳ　むすび

英雄叙事詩は闘争・戦争・決闘を主題とする物語であるといっても誤りではない。戦争は異民族や異集団との戦いである。モンゴルや中央ユーラシアのテュルク語系諸族に伝承されてきた英雄叙事詩にはしばしば歴史的な民族抗争が背景としてある。また、決闘には弓矢、馬競走、そして最後は素手の格闘技があり、それはまた民族的な祭典での競技として今日にまで受け継がれてきている。アイヌのユーカラでは棍棒の打ち合いで勝負がつかないと、太刀での斬り合いとなるが、物語の世界では死ぬことは決してない。そのような競技や闘争がユーラシアの諸民族の英雄叙事詩では主人公の花嫁獲得、すなわち妻覓のなかで大きな特徴となっている。しかも、そのような闘いがな

されるのは英雄・勇者たちばかりでない。遠征者はしばしば美貌と膂力に秀でた女性・未来の花嫁と相対し力や武技を競う。英雄叙事詩の世界では強者は強力な伴侶、すなわち力量や技量において互角の勇者を求め合う。そして、女性は美しくなければならず、勇者もまた美丈夫である。英雄叙事詩では勇者やヒロインの姿形、その衣装が事細かに叙述されることもまた共通する特徴であるが、それは故なきことではない。さて、婚姻に際して力技を競い、数多の敵対者との闘争をくりかえしながら、配偶者として強者・膂力ある者を理想とすることの意味はどこにあるのであろうか？

人間界から飛躍して動物世界を眺めてみよう。近年の動物生態学では陸海を問わず、地球上の大小さまざま動物の生態が一層明らかにされてきている。周知のことながら、一般的に動物界では繁殖期に雄同士の壮絶な闘いが展開され、群をなす動物の世界では勝者が敗者の雌と幼獣の群を我がものとし、子孫を残すことができる[4]。また、動物界では配偶者の選択権は雄だけに限定されない。ライオンの雌はたてがみや毛色によって好みの相手を選ぶことが明らかにされている。南半球の鳥類のなかには雄がユニークなコスチュームとパーフォーマンスの競演を繰りひろげ、雌の歓心を惹こうとするが、必ずしも観客の雌鳥の意を迎えることにはならない。優先的な選択権は雌にある。このような動物界での生態は「雌雄選択/性選択」(sexual selection) と称されている。

叙事詩のなかで婚姻に際して展開される競技や闘争は人間の動物としての存在の遠い記憶を継承しているのかもしれないと仮定することはできないであろうか？言語をもつ人間はいうまでもなく社会的な存在である。まさに、このことが自明のこととしてあり、人文科学の分野では人間の生物学的存在としての側面が看過されてきたように思われる。しかしながら、正に、もっとも生物学的な次元から遠い言語文化である叙事詩の世界には「動物としての存在・社会的存在」としての人間の全体像が真正直に映しだされていると云えそうである。英雄叙事詩の口演では聴き手は戦闘場面での勇者の活動ぶりに自己投入して感情の高ぶりを共有することになる。英雄叙事詩の世界は生身の人間の世界ではない。英雄は死なないし、また、死んでも蘇る。そのような苛烈凄惨な闘争は神話や昔話では消えて、せいぜい厳しい試練となり、また、求婚難題となる。この試練や難題は配偶者としての資格試験・審査ではあるが、そこで問われるのは膂力や闘う力ではない。見知らぬ他所の地域や集団からの求婚者に娘を嫁がせる側にとって、婿としての資質や能力を問い、信頼の拠り所を求めることは蓋し当然のことである。試練や難題には社会的な規範や文化の諸相が投影されているばかりでなく、それには叙事詩が紡ぎ出された時代の諸民族社会の婚姻の在りようがかかわっているかもしれない。

ユーラシアの口承文芸の観点からいえば、英雄叙事詩における婚姻闘争と神話・昔話における試練や求婚難題は配偶者選択について肯首しうる拠り所を求めようとする人間社会に普遍的な心理的表象といえないであろうか。

---

[4] NHK の日曜番組「ダーウィンが来た」(2014 年 8 月 10 日放送）では、太平洋を回遊するザトウクジラの繁殖期の生態が映された。巨大なザトウクジラの雄たちの集団は競走（競泳？）、水上への飛躍などで雌雄を競い、最後には尾ビレや胸ビレを打ち合う決闘に及ぶ。こうして勝者の雄クジラが子孫を残す優先権を得るという興味深く、また驚異的な映像があった。

文献

今西錦司・吉本隆明
1995　『ダーウィンを超えて』中公文庫
荻原眞子
1997　「(資料) エヴェンキの英雄説話の２つのテキスト」『北海道立北方民族博物館研究紀要』第６号：125−146
2001　「エヴェンキの英雄叙事詩　『イルキスモンジャ勇者』」(荻原眞子編 『ユーラシア諸民族の叙事詩研究（１）—テキストの梗概と解説—』」（研究プロジェクト報告）千葉大学大学院社会文化科学研究科：84−122
2002　「ユーカラのヒロイン－英雄叙事詩の比較研究試論」『口承文藝研究』第25号：104-120
2005　「競う花嫁・女勇者・シャマン—ユーラシアの英雄叙事詩に共通するヒロイン像」（吉田敦彦監修)『比較神話学の鳥瞰図』大和書房：175−204
『フィンランド国民的叙事詩　カレワラ　上下』（森本覚丹訳）講談社学術文庫（1938）1983
『フィンランド叙事詩　カレワラ　上下』（リョンロット編　小泉保訳）　岩波書店　1976
金成まつ、金田一京助
1975-76　『アイヌ叙事詩ユーカラ集』I-IX、三省堂
金田一京助
1931　『アイヌ叙事詩　ユーカラの研究』東洋文庫
1936　『ユーカラ』岩波文庫
グリム（小沢俊夫訳）
1985　『完訳　グリム童話一子どもと家庭のメルヒェン集　I，II』ぎょうせい
グリム（金田鬼一訳）
1979　『グリム童話集』岩波文庫
『古事記』（倉野憲司校注）岩波文庫　1963
相良守峯
2001（1955)『ニーベルンゲンの歌』岩波文庫
ダーウィン
1990　『種の起源』（八杉龍一訳）岩波文庫
1967　『世界の名著　人類の起源』（池田次郎・伊谷純一郎訳）中央公論社
『竹取物語』（全訳注　上坂信男）講談社学術文庫　1978
知里真志保
1975　『知里真志保著作集　別巻II　分類アイヌ語辞典　人間編』平凡社
長谷川寿一・長谷川眞理子
2000　『進化と人間行動』東大出版会
フレーザー（永橋卓介訳）
1975（1951)『金枝篇』岩波書店

マルコ・ポーロ（愛宕松男訳）
1976（1971）『東方見聞録　2』平凡社

（おぎはら　しんこ・千葉大学名誉教授）

Tasks, Battles Concerned Marriage and Sex Selection

OGIHARA Shinko

Key word: Eurasia, epics, tasks assigned suitors, marriage-battles, sex-selection

Summary

In order to select the bridegroom the oral tradition as heroic epics, myths and tales has different kinds of habits: tasks assigned suitors, test of strength, games of bow and arrows etc. Those kinds of contests or battles in some cased are found everywhere in Eurasian epics. The paper takes some texts as samples of the theme from Finnish «Karevala", German «das Nibelungenlied», the Evenk heroic epics, the Ainu «yukar» and the Brüder Grimm Kinder-und Hausmärchen.

As a tentative conclusion the author proposes that the tasks and battles concerned marriage may be compared with the sexual selection in the animal world.

Key word: ユーラシア、叙事詩、求婚難題、婚姻闘争、雌雄選択／性選択